

発達障害者の日常生活における感覚世界

当事者から見た一考察

Sensory world in the daily life of people with developmental disabilities

安井 秀仁

Yasui Hidehito

立命館大学大学院人間科学研究科博士後期課程

Graduate school for human science Ritsumeikan University

Key words: 当事者研究, 発達障害, 感覚世界

目的

筆者は2008年に広汎性発達障害の診断を受ける。その症状については、周囲から理解を得られることもあれば、無配慮であると感じることもある。石原(2013)は「当事者研究は、自らの病気や症状、問題について語り合う場を作り出すことによって、自分の問題に言葉を与え、自己を再定義し、人とのつながりを回復する機能をもつものである。」としている。また、吉濱(2018)は「発達障害の人にとって、社会生活を送るということ自体が負荷の高い行動であるということをも、認識しなければなりません。」と述べている。

本研究は当事者研究の視点から、当事者に対する支援制度を含めた感覚世界を明らかにすることにより、非当事者からは見えない生活の中での困難を明らかにすることである。

方法

筆者が所属する当事者会で広汎性発達障害及びアスペルガー症候群と診断された協力者2名と筆者の計3名で本人の症状で苦しんでいることに対する見解についてインタビューを行い、その見解をグラウンテッドセオリーアプローチ(以下、M-GTAと呼ぶ)で分析を行った。調査期間は201X年X月X日の予備調査とX月X日の本調査の計2回である。

結果

M-GTAによる分析の結果、18概念、5カテゴリー、9サブカテゴリーに集約された。

カテゴリーは以下の5つである。

- ① 日常生活の困難
- ② 社会生活を送る
- ③ 発達障害である自分
- ④ 当事者からの希望
- ⑤ 社会全体からの理解

サブカテゴリーは以下の9つである。

- ① 不快な体験
- ② 生活を送る

- ③ 不安なこと
- ④ 対人ストレス
- ⑤ 診断

概念は以下の18つである。

- ① パニック
- ② フラッシュバック
- ③ 感覚過敏
- ④ 対人スキル
- ⑤ 仕事スキル
- ⑥ 仕事への不安
- ⑦ 対人不安
- ⑧ 無理解
- ⑨ 拒否できない自分
- ⑩ 過剰な気配りによるストレス
- ⑪ 罪悪感
- ⑫ 診断によるメリット
- ⑬ 自己理解
- ⑭ 現行制度への不満
- ⑮ 公的支援ニーズ
- ⑯ 教育支援ニーズ
- ⑰ 周囲に対する理解の要望
- ⑱ 社会への期待

分析の結果として主に、「日常生活において困難を抱えており、社会に対して理解を求めている今」までのプロセスが明らかになった。特に制度に足りないものとして「自己理解」に対する要請が明らかとなった。

考察

当事者研究の視点から、当事者に対する支援制度を含めた感覚世界について概観し、諸課題について考察した。

今後当事者の意見が社会に伝わり日常の困難を減らすために活動を続ける予定である。

引用文献

石原孝二(2013)『当事者研究の研究』p67 医学書院
吉濱ツトム(2018)『発達障害の人のための上手に「人付き合い」ができるようになる本』p12 実務教育出版